



天の彼方で愛を叫ぶ



橋本コウ

妻が死んでから、生きる力が減ってきたように思う。太陽がのぼり、上空高くで人々を照らしつけ、西の空に沈んでいく。そして夜の帳が下ろされる。私はいま、その段階にいるのだろう。

妻が太陽のようだと思ったのなんて、いったい何十年前のことだろう。たとえ大昔で恋愛結婚ではなくても、確かに当時、私たちはお互いを愛し、いまの若者と同じようにドキドキし、顔を赤らめた。妻は私にはもったいないくらいキレイで、文字通り太陽のようだった。若い頃には言えた恥ずかしい言葉だけど、結婚してしばらくするうちに言えなくなっていく。そして中年にさしかかると、言えないのではなくて、言う必要もないくらい相手が憎くなってくる。でも不思議だ。高齢になり間もなく90歳を迎えようとしているいま、やっぱり妻は太陽だったと思えるのだから。

妻は三年前から病床についていた。家の廊下で転んで頭を打ち、すぐに手術したものの経管栄養しか採れない体になってしまった。幸い意識はあるから会話はできるし、入院せずに家のベッドで生活はできるから、寂しくはなかった。経管栄養が家でもできるというのはそのときに知った。お腹から管が出ているからそこに点滴のような栄養剤をくくりつけるだけだ。これに関してはお母さん（つまり私の息子の妻だ）にだいぶ世話になった。下のお世話や経管栄養を嫌な顔をせずやってくれたお母さんは、自慢のお母さんだ。

そんなにたくさん面倒を見てもらったのに、三ヶ月前、妻は意識が遠くなることが多くなり再入院したのだ。妻がなくなる三日前、息子に無理を言って病院に連れていってもらった。「年寄の心配性」と思われるかもしれないが、私が正しかった。たくさん喧嘩もしたし、憎み合ったりもしたけれど、意味もなく長年一緒にいたわけではない。妻が苦しんでるのは、離れていても心でつながっているから私にはわかったんだ。

妻の葬儀のときは悲しみが強すぎて、私は葬列に参加したくなかった。息子兄弟たちは「そんなこと言わないで、ちゃんと出ないとダメだよ」と子供扱いをしているように言ったが、そんなのではない。私ももう高齢者だし、耳も聞こえなくなってきたけど、心はちゃんとあるんだ。妻が死んでしまった気持ちは、どんなに想像しても、そのときにならないとわからないはずだ。私だってこれだけ生きてきても初めての気持ちなのだから。

車椅子を押されて、骨になった妻に対面したとき、私は火葬場の高い天井を見上げた。涙で滲んだ天井に、ひっそりとこちらを見つめる妻が見えた。妻は何かを言っていたが、まわりの人の泣く声が大きくて聞こえなかった。でも、それでもよかった。きっと私の気持ちと同じだろう。

妻がいなくなったあとは、私も伏せがちになり、寝たり起きたりする頻度が多くなってきた。喜怒哀楽も激しくなり、ときには家族に当たり散らしたり、ときには子供のように甘えたりした。いまは痴呆症とは言わず、認知症と言うようになった。まわりからは「困ったおじいちゃん」と思われるに違いないが、真実は違う。妻がいなくなった寂しさが、私を妻探しの旅に連れていくようになったのだ。妻と結婚したときの、妻の若々しくて元気な姿。大喧嘩したときのら怒って手が付けられない妻。子供が生まれて幸せそうに赤ん坊を抱く妻の横顔。孫に肩揉みをされて

気持ち良さそうな妻。私が知っているいろんな妻の姿を、遠い過去や近い過去から探してくるのだ。でも、このタイムトリップは老体には負担が大きく、いったりきたりする感情の起伏で心が混乱させられる。なかば夢見がちな心情で日常生活を送ることになるので、まわりの目には奇異に映るに違いない。これが私が感じた認知症の正体だ。

妻との過去を旅したときに思い出した事実がある。妻との日々に、妻の家族がほとんど登場しないことだ。妻の母親は時代的に仕方がないとはいえ、旦那を早くに亡くし、再婚を繰り返していた。本当の肉親は弟ひとりだったが、その兄弟もはやくに亡くし、天涯孤独の身の上だったのだ。自画自賛するわけではないが、妻は私と結婚してはじめて家族と呼べるものを持ち、自分が人生に翻弄された分、子供たちは幸せになれるよう、一生懸命がんばって生きてきた。妻といっしょの人生は苦労しながらも幸せにあふれた、やっぱり良い人生だった。

妻が亡くなってから三ヶ月しか経っていない。家の中もまだバタバタしていて、妻のための仏壇もまだ儀式をしていないから開かれていない。そんな時期に残された家族、特にお母さんには大迷惑をかけてしまうが、私は妻のもとへ行こうと思う。いまでは好きなときに過去に旅することができるようになったが、あくまでそれは過去だ。いまの妻にはこのままでは会えないのだ。たとえ死の直前の妻だったとしても、それは過去の妻でしかなく、天国でひとりでこの家を眺めている妻がいまこの瞬間にきっと存在しているのだ。もちろん結婚してすぐの若かりし頃の妻の方がキレイだし、感情の高揚感は強い。でもいま私に必要なのは、もっと根源的な心の安定だ。もう一度いうが、私は妻のもとへ行こうと思う。

希望に向かって進んでいく場合、普通はより強いパワーを発する必要があるが、私の場合は希望に向けてより弱くなっていかなければならない。この感覚は不思議なもので、自分で願えば願うほど、体が弱くなっていくのがわかる。もしかするとそれは強力なパワーで体をコントロールしていて、残されたパワーを急速に消費しているだけかもしれない。いずれにせよ、私は日に日に弱っていき、わずか10日くらいで体に不調をきたすようになった。尿が出なくなったのだ。お母さんに連れられていった行きつけの病院が出した検査結果は肝不全。私は診察したその日入院することになった。私の辞書には「入院」という言葉はない。生まれて初めての入院生活だ。いよいよカウントダウンが始まったと思った。お母さんは妻のときと同じように、毎日私の看病に来てくれた。ヒゲを剃ってくれたり、体を拭いてくれたりした。肝不全で尿は出なかったので、そっちの面倒を見てもらわなかったことは救いだった。

入院して三日間、食事が喉を通らなかった。ついこの前までは肉だって少しは食べられたが、もう食欲はなくなっていた。お母さんが「おじいちゃん、食べないと元気出ないんだよ」と毎食話しかけてくれる。お母さんには申し訳ないけど、本当に喉を通らなかった。

入院して四日目。いつもと同じようにお母さんがお見舞に来てくれた。今日は孫も一緒に来てくれたようだ。今朝起きたときに、私には確信したことがあった。今日だ、ということだ。死の直前なのにそんなことを考える余裕があるのが不思議だが、永くつきあってきた心の声が私にそ

れを教えてくれた。昼食時に、お母さんが泣きそうな顔で私にご飯を食べさせようとする。私は最後の力を振り絞って、お母さんの願いを叶えてあげたかった。お母さんが差し出してくれたスプーンの中にはひとくち分のおかゆが乗せられていた。私は口をあけて、子供のようにお母さんに食べさせてもらった。あんなに食欲がなくなっていたのに、最後にお母さんに食べさせてもらったおかゆは本当に美味しくて、妻にも食べさせてあげたかった。

昼食のあと、私はお母さんと孫を家に返した。涙で送られるのは私にはつらかったのだ。妻のことで家族の涙はたくさん見たから、せめて私のときはできるだけ泣かなくてすむようにしたい。

「また明日来るからね」

お母さんの最後の言葉だ。お母さんと孫が病室の中を見て、やがてドアが閉じられた。

「お母さん、いままでありがとう」

私は静かに目を閉じた。最後に感じた五感は苦しさではなくて、閉じた目から耳に流れ落ちる一筋の涙だった。

私の告別式で、孫が弔辞を読んでいる。

「この涙は悲しみの涙じゃないよ、おばあちゃんのところに早く行ってあげた優しいおじいちゃんに感動した涙だよ」

「俺たちは幸せだな」

私はそう言って隣を見た。涙で崩れた顔で、何度も何度も頷く妻がそこにいた。